鎌倉おもちゃ屋物語

くろすかずきよ

その10

面白駄玩具の紹介と
新米おもちゃ屋の
どたばたエッセイ！

鎌倉の有名な駄玩具屋「くろぬま」が閉店しました。
私の少年時代の駄玩具屋によく似た
「戦争で焼け残った昭和の家」のたたずまいで
観光客にも人気のスポットだったのに。

くろぬまは子ども相手、うちは大人相手、ポリシーは違うけど近所のご同業、これからライバルとして、しのぎを削る戦いのドラマが始まるはずだったのに……残念です。店主のおじいさんが亡くなったとか。娘さんらしきお姉さんが手伝っていたのに後は継いでくれなかったんですね。こういうおもちゃ屋を継ぐのはやはり無謀なんでしょうか。その後うちに子どものお客が増えたような……でも、ヒゲだるまオーナーはこう言います。

そう！　私も同感。なのに、おもちゃは
子どものためだけのものだと思っている親が
ホントたくさんいるんですよ。

そんな親はおもちゃ屋に来るとまず子どもを解き放つ、
自分たちは外でタバコ吸ってたりする。おもちゃ屋を子どもの遊び場だと思っているんですね。そんな親の子どもたちはもうやりたい放題、片っ端から次々おもちゃを触りこちらの説明などろくに聞かず無茶苦茶します。遊んだものは元に戻さず、違う所に置きまくる。するとすぐに親が声かけます。「もう行くよ！」子どもはまだまだ遊びたいのでぐずったりする。揚げ句に「今日は何にも買わないって言ったでしょ！」と無理やり引っ張っていく。これ一番悪いのは誰？子どもじゃない、親ですよ親！　なんで一緒におもちゃを楽しまないんだろう。遊び方を教えてやらないんだろう。子どもを楽しませたくて入ってきたのならなんで子どもが飽きるまで居てやらないんだろう。おもちゃをじっくり楽しむ遊び方を親が手本となって見せないから、
子どもはおもちゃの扱い方がわからず次々
いじって無茶苦茶するんですよ。
おもちゃ屋を滅ぼすのはこういう親、
大人のせいなんです。台風一過の店の中、
いつもは温厚なオーナーと二人でそんな
バカ親をののしりあう日もたびたびです。

黒須和清　1955年東京生まれ。横浜在住。
洗足こども短期大学教授として手作りおもちゃや人形劇を教えるかたわら、ペーパークラフトや執筆活動、研修会講師の仕事などで忙しい。

店に来てほしいのはおもちゃを楽しめる大人。その代表が通称「キントトさん」。女優の岸恵子似の上品なおばさまですが実は筋金入りのおもちゃ好き。面白いおもちゃを求めて各地を飛び回り、おもちゃ好きの集まりに参加してはその戦果を「きんとうん」というおまけ付きミニコミ誌をつくって載せているというガチな発信系おもちゃマニアです。月１ぐらいでやって来て、今日も開口一番

ほら、私の最新おもちゃ関係情報もすでに知っている。私が行くおもちゃ問屋なんか全部行っているし、私が大発見！ これぞ！と思って仕入れてきたおもちゃもとっくに持っていたりする。「面白い」が基準の目利きは確かで、面白ければどんどん買ってくれるありがたいお客様！　なんですが……。

オーナーが仕入れていたこんなおもちゃ、上のビー玉が道無き道をジグザグに転がってきちんと下のお皿に入るという不思議なもの。私はこれが好きで、でもちょっとお高くて。だからこの店に来るたびに店員特権で遊んでいたのですが、当然キントトさんがこれを見逃すわけがない。オーナーもあっさり売っちゃうんだものなぁ！　残念！

逆に目利きのキントトさん、面白くないものは見向きもしません。これが怖い！キントトさんが来る日が決まったら、脳みそ全開で商品作りと仕入れに走る私、ミシュランの調査員を迎える食堂のオヤジです。そろえた物がお気に召せば、すごく喜んでくれて、たくさん買ってくれて、ミニコミ誌「きんとうん」に載せて褒めてくれて、まさに三つ星扱いになるのですからそりゃ頑張りますよ！
そんなミシュランがお帰りになったら、もうその日は終わり。
お客相手もしない、ただのふぬけのイワトビペンギン。
でもこういう方こそが、おもちゃ絶滅を阻止してくれている心強い味方なのですよね。世の大人が親が、みんなキントトさんならいいのになあ！